

柳宗元の望郷詩

松本肇

一 山に登る

柳宗元は柳州で「登柳州峨山」（卷四十二）と題する詩を作っている。峨山に登り、望郷の思いを詠じたものである。

荒山秋○日○午 荒山 秋日午なり

独上意悠悠 独り上れば意悠悠たり

如何望郷処 如何ぞ 望郷の処

西北是融州 西北は是れ融州

平易なことばで書かれたこの詩の前半には、望郷の思いと結びつく詩語がたくみに用いられている。「秋日」は、劉長卿「今日登吳公台上寺遠眺寺即陳將吳明徹戰場」（『劉隨州詩集』卷二）の中に、

古台揺落後 古台 揺落の後

秋○日○望○郷○心 秋日 望郷の心

とある。古戦場での感慨を記した作品。また、「悠悠」は、石崇「贈裴腆詩」（逯欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』

晋詩卷四、中華書局、一九八三）の中に、

寂○寂○守○空○城　寂○寂○と○し○て○空○城○を○守○り

悠○悠○思○故○郷　悠○悠○と○し○て○故○郷○を○思○う

と見える。つまり、柳宗元の詩は「秋日」「悠悠」の中にすでに望郷の思いが暗示され、それが第三句の「望郷」ということばにスムーズに連動していく仕組みになっている。融州は、今の広西壮族自治区柳州市内。『旧唐書』卷四十一・地理志四の嶺南道・柳州の説明に「北のかた融州に至ること二十里」とあり、その融州から故郷の長安までの距離は、「京師に至ること五千二百七十里」（同上・融州の説明）と記されている。望郷詩という観点から見た場合、この詩には「登高遠望」と「隔て」のモチーフが用いられていることになる。以下、柳宗元の望郷詩について考察する前に、従来の望郷詩の主な表現パターンを探ってみることにしよう。

二 『詩経』と『楚辞』の望郷詩

望郷詩の最も早い例はすでに『詩経』の中に現われる。『詩経』魏風、「陟岵」は、出征兵士の望郷の思いを詠じたもので、岩山に登った兵士に肉親が呼びかけるといふ形式を取っている。

陟彼岵兮　彼の岵に陟り

瞻望父兮　父を瞻望す

父曰嗟予子行役　父曰く嗟予が子よ行役して

夙夜無已　夙夜已むこと無からん

上慎旃哉　上わくは旃を慎まんな

猶来無止　猶お来りて止まること無かれと

これは父親が息子に呼びかける部分で、行軍のつらさに同情しながら、戦地に留まらずに帰って来いと言っている。続いて母親が、戦争で眠れないのを心配しながら、あきらめないで帰って来いと呼びかけ、最後に兄が、

仲間と一緒にいるかどうか心配しながら、死なないで帰って来いと呼びかける。「陟岵」(岵は、ごつごつした岩山)という詩題から明らかのように、ここには「登高遠望」のモチーフが使用されている。唐風の「鵲羽」(鵲は、のがん)も、兵士の望郷の思いを詠じている。最初の部分を見ると、

肅肅鵲羽 肅肅たる鵲羽

集于苞栩 苞栩に集まる

王事靡盬 王事は盬きこと靡く

不能蓺稷黍 稷黍を蓺うる能わず

父母何怙 父母は何をか怙まん

悠悠蒼天 悠悠たる蒼天よ

曷其有所 曷か其れ所有らん

鳥が木に止まる描写から始まり、王の戦争は容赦なく、故郷に帰ってきびを植えることもできないので、父母は何を頼りに生きているだろう、と述べている。加納喜光『詩経』上(中国の古典一八、学習研究社、一九八二)によれば、「荒れた田野と親の飢えに思いをはせ、安らかな日の来るのを祈る」詩である。ここでは、「荒れた故郷に心を痛める」というモチーフを指摘することができる。

小雅・鴻鴈之什の「黄鳥」は、最初の部分で次のように歌っている。

黄鳥黄鳥 黄鳥よ黄鳥よ

無集于穀 穀に集まる無かれ

無啄我粟 我が粟を啄む無かれ

此邦之人 此の邦の人

不我肯穀 我を肯えて穀かさず

言旋言歸 言に旋り言に歸り

復我邦族 我が邦族に復らんかえ

うぐいすに、かじのきに止まるな、私の穀物をついばむな、と呼びかけ、この国の人たちとは一緒に暮らしていけない、車を返して一族のもとに帰りたい、と述べている。加納喜光『詩経』下（中国の古典一九、学習研究社、一九八三）によれば、「異郷での居心地の悪さと、望郷の思い」を述べたものという。ここでは、「異郷の風土への違和感」というモチーフが現われ、また、「黄鳥」つまり鳥のモチーフも用いられている。

望郷詩に関連するものでは、小雅・鹿鳴之什の「杕杜」がある。「出征兵士の帰還を待つ妻の抒情」で、「二人を隔てる長々しい時間と空間に対する悲しみと祈りを述べる」（加納喜光『詩経』下）作品である。この中では、「征夫遑止」「征夫婦止」「征夫不遠」「征夫邇止」のように、夫の帰還を望む妻の心情が段階的に高められている。この作品は、兵士の妻の心境を詠じたものだが、ここには隔てのモチーフが用いられている。

『楚辞』の場合はどうだろうか。藤野岩友氏は「楚辞九弁考」（『増補巫系文学論』、大学書房、一九六九）の中で、「九章を見ると、放逐流離の身を悲しんで故国を思ふ情がまことに痛切なものがあり、いかにも羈旅の文学、望郷の文学としての性格が強い」と述べている。九章の「哀郢」の中に次のような一節がある。

鳥飛反故郷兮 鳥は飛びて故郷に反りかえ

狐死必首丘 狐は死して必ず丘に首す

信非吾罪而棄逐兮 信に吾が罪に非ずして棄逐せらる

何日夜而忘之 何ぞ日夜にして之を忘れん

ここには、鳥のモチーフが現われるとともに、無実の罪による追放という独特の要素が加わっている。

三 漢魏六朝の望郷詩

漢魏六朝になると、望郷詩に新しい展開が見られる。それは故郷との空間的隔たりを解消するための試みを詠じるようになることである。陸機の「為顧彦先贈婦二首」其一（『文選』卷二十四）を見よう。

辞家遠行遊 家を辞して遠く行遊す

悠悠三千里 悠悠たり 三千里

京洛多風塵 京洛 風塵多く

素衣化為緇 素衣 化して緇と為る

修身悼憂苦 身を修むるも憂苦を悼み

感念同懷子 同懷の子を感念す

隆思乱心曲 隆思 心曲を乱し

沈歎滞不起 沈歎 滞りて起らず

歎沈難尅興 歎び沈みて尅く興し難く

心乱誰為理 心乱れて誰か為に理めん

願返帰鴻翼 願わくは帰鴻の翼を仮り

飜飛游江汜 飜飛して江の汜はとりに游ばん

これは、「都の生活のわびしさを述べ、故郷に居残る妻への思いを歌う」（花房英樹『文選』三、全釈漢文大系二八、集英社、一九七四）詩。最後に、鳥の翼を借りて妻のもとに飛んで行きたいと述べていることに注意しよう。鳥になって空を飛びたいという願望は、異郷と故郷との距離をなくしてしまおうという積極的な気持ちを表わしている。なお、「悠悠三千里」（出典は蔡琰「悲憤詩」、『漢詩』巻七）、「京洛多風塵」はそれぞれ、望郷詩における「隔て」と「異郷の風土への違和感」のモチーフを示している。

陸機にはまた、「贈従兄車騎」（『文選』巻二十四）と題する詩がある。「ふるさとの山川を思いやり、親しい人のおもかけをしのび、身内から離れているせつなさを歌う」（花房英樹『文選』三二）もの。その中で、

安得忘帰草 安んぞ忘帰いすくの草を得て

言樹背与袷 言ことに背こうしゅうと袷まへとに樹うえん

と述べている。帰りを忘れるという名の草を取って、後ろや前に植えたいという。これは、『詩経』衛風、「伯兮」に

焉得護草 焉にか護草を得て

言樹之背 言に之を背に樹えん

とあるのに基づく。戦争に行った恋人への思慕を歌う詩。そこでは、草を植える行為は恋人への思慕と結びついてきたが、陸機はそれを望郷の思いに転換した。忘却のために草を植えるという考え方は、鳥になって空を飛びたいという願望に比べれば、消極的と言えるかも知れない。だが、故郷との距離をゼロにする試みという点では、同じ目的を持つものなのである。

現実には故郷に帰れなくとも、故郷の夢を見ることはできる。夢の中。そこでは異郷と故郷の距離は完全に解消される。鮑照に「夢帰郷」(『鮑氏集』卷七)と題する詩がある。江南の人が北の旅に出て、夢の中で故郷に帰り、妻と楽しむことを述べている。

1 銜涙出郭門 涙を銜みて郭門を出で

撫劍無人達 劍を無人の達に撫す

沙風暗空起 沙風 暗空に起こり

離心眷鄉畿 離心 郷畿を眷みる

5 夜分就孤枕 夜分 孤枕に就き

夢想暫言歸 夢想 暫く言に歸る

孀婦当戸嘆 孀婦は戸に当たりて嘆き

搔糸復鳴機 糸を搔きて復た機を鳴らす

慊款論久別 慊款 久別を論じ

10 相将還綺閣 相将いて綺閣に還る

歴歴簷下涼 歴歴たり 簷下の涼

隴隴帳裏輝 隴隴たり 帳裏の輝き

刈蘭争芬芳 蘭を刈りて芬芳を争い

採菊競葳蕤 菊を採りて葳蕤を競う

15 開奩奪香蘇 奩を開きて香蘇を奪い

探袖解纓徽 袖を探りて纓徽を解く

夢中長路近 夢中 長路近く

覺後大江遠 覺後 大江遠う

驚起空嘆息 驚起して空しく嘆息し

20 恍惚神魂飛 恍惚として神魂飛ぶ

白水漫浩浩 白水 漫として浩浩

高山壯巍巍 高山 壯として巍巍

波瀾異往復 波瀾 往復異なり

風雲改榮衰 風雲 榮衰改まる

25 此土非吾土 此の土は吾が土に非ず
 慷慨当告誰 慷慨 当に誰にか告ぐべき

この詩は、第一〜八句で、北の旅人が孤独な夜の夢の中で故郷に帰り、妻に対面するようすを描く。第九〜一六句は、夢の中で妻と楽しい時を過ごすことを歌う。第一七〜二六句は、目覚めた後の現実（異郷での生活）を嘆いている。異郷での孤独な生活を忘れて、妻のもとに帰れるのは、夢の中だからである。夢から覚めれば再び現実に引き戻されるのは言うまでもない。「夢中長路近、覺後大江遠」。夢の中の故郷は近いが、現実には遠い。ここには、幸福な夢と不幸な現実の対比がある。この図式は、望郷の夢の詩にほぼ一貫している。蘇子卿の「南

征詩」〔陳詩〕卷九)にも、

故郷夢中近 故郷 夢中に近く

辺愁酒上寛 辺愁 酒上に寛くす

とある。次に、柳宗元の望郷詩について考察することにしよう。

四 柳宗元の望郷詩

柳宗元の故郷は長安である。⁽³⁾永州に流された柳宗元に草木を詠じる詩がいくつかあり、その中で望郷の思いを吐露している。「早梅」(卷四十三)と題する詩では、

欲為万里贈 万里の贈を為さんと欲すれば

杳杳山水隔 杳杳として山水隔たる

と歌う。梅を遠い故郷に贈りたくても、山川に隔てられているためにできないというのだ。ここに現われた隔てのモチーフは、望郷詩の特徴のひとつである。また、冒頭に「早梅発高樹、迴映楚天碧」と歌うのは、南国の空の青さが北国生まれの柳宗元には異様に映ること、すなわち異郷の風土への違和感を表明したものである。

南中榮橘柚(卷四十三)

橘柚懷貞質 橘柚 貞質を懷き

受命此炎方 命を此の炎方に受く

密林耀朱緑 密林 朱緑を耀かし

晚歲有余芳 晚歲 余芳有り

殊風限清漢 殊風 清漢に限られ

飛雪滯故郷 飛雪 故郷に滯る

攀条何所歎 攀条を攀きて何の歎く所ぞ

北望熊与湘 北のかた熊と湘とを望む

この詩は、謝朓の「詠王晋安」(『文選』卷二十六)に、「南中榮橘柚、寧知鴻雁飛」とあるのを詩題に用いたものである。「詠王晋安」は、南国へのあこがれを詠じる詩で、陸機「為顧彦先贈婦二首」其一(『文選』卷二十四)の「京洛多風塵、素衣化為緇」に基づきながら、

誰能久京洛 誰か能く京洛に久しからん

緇塵染素衣 緇塵 素衣を染む

のように、都の生活への嫌悪感を表明する。柳宗元は謝朓の詩句を用いながら、南へのあこがれを北への望郷の思いに反転させた。それは典故の逆用と言えるだろう。「飛雪滯故郷」についても、同じことが言える。「飛雪」は『楚辭』招魂に見えることばである。

魂兮归来 魂よ帰り来れ

北方不可以止些 北方は以て止まるべからず

増氷峨峨 増氷は峨峨として

飛雪千里些 飛雪は千里なり

これは、北方は恐ろしいところだと述べて、屈原の魂を招く箇所である。「飛雪」という語を用いながら、招魂における北への嫌悪を、柳宗元は北への憧憬に反転させたのである。これもまた、典故の逆用の例と言えよう。それらは、柳宗元の屈折的な心情を示しているかも知れない。

なお、「南中榮橘柚」で、故郷を直接指示せず、「北望熊与湘」(熊と湘は、湖南省の熊山と湘山)のように異郷の山河を提示することによって、帰郷の障害の大きさを暗示する手法も見落とすことはできない。柳州に流されてからの作品では、「登柳州峨山」の「如何望郷処、西北是融州」や、「柳州寄京中親故」(卷四十二)の「勞君遠問竜城地、正北三千到錦州」などが同様の例である。錦州は、今の湖南省懷化市内。『旧唐書』卷四十・地理志三の江南西道・錦州の説明に「京師に至ること三千五百里」という。錦州から都までの距離は、柳州から錦

州までの距離と同じくらい遠かったのである。

望郷詩における「荒れた故郷」のモチーフについて見れば、「首春逢耕者」（巻四十三）の

故池想蕪没 故池 蕪没を想う

遺畝当榛荆 遺畝 当に榛荆なるべし

などが挙げられよう。「春懐故園」（巻四十三）もほぼ同じことを述べている。

九扈鳴已晚 九扈 鳴くこと已に晩く

楚郷農事春 楚郷 農事春なり

悠悠故池水 悠悠たり 故池の水

空待灌園人 空しく園に灌ぐの人を待つ

うずらが鳴いて農事を告げる季節になったのに、故郷の庭園の手入れをする人が誰もいないというのである。柳宗元の望郷詩が、従来の望郷詩の表現パターンを踏まえていることが理解できよう。

次は、柳宗元の望郷詩における夢について考えたい。

梅雨（巻四十三）

梅実迎時雨 梅実 時雨を迎え

蒼茫值晚春 蒼茫として晩春に値う

愁深楚猿夜 愁は深し 楚猿の夜

夢断越雞晨 夢は断たる 越雞の晨

海霧連南極 海霧 南極に連なり

江雲暗北津 江雲 北津に暗し

素衣今尽化 素衣 今尽く化するは

非為帝京塵 帝京の塵の為に非ず

この詩は異郷の風土への違和感を詠じたもので、とりわけ最後の二句に注目したい。この二句は、「京洛多風塵、素衣化為緇」(陸機「為顧彦先贈婦二首」其二)に基づきながら、陸機における北の都への違和感を南方への違和感に反転させたものである。これもまた、典故の逆用の例で、柳宗元の望郷詩の大きな特徴と言つてよい。沈德潜『唐詩別裁集』巻十二は、この詩について、「陸士衡の語を活用するは、帝郷を念おもい、放逐を傷いたむ所以なり」と述べている。

ところで、「梅雨」の詩には「夢断越雞晨」とある。にわたりの声で夢が中断されたことが分かる。柳宗元はいったいどんな夢を見ていたのだろうか。故郷の夢だったのではないかと、私は思う。柳宗元に次のような詩があるからである。

零陵早春(卷四十三)

問春從此去 春に問う 此より去りて

幾日到秦原 幾日か秦原に到らん

憑寄還鄉夢 憑寄す 郷に還る夢に

慙慙入故園 慙慙に故園に入れと

南方の春は早い。その春と一緒に夢の中で故郷に帰りたいと歌っている。夢の中では誰でも故郷に帰ることができる。柳宗元に途切れた夢を歌う詩がもう一首ある。

聞黄鸝(卷四十三)

1 倦聞子規朝暮声 聞くに倦む 子規朝暮の声

不意忽有黄鸝鳴 意わわざりき 忽ち黄鸝の鳴く有らんとは

一声夢断楚江曲 一声 夢断たる 楚江の曲

满眼故園春意生 满眼 故園 春意生ず

5 目極千里無山河 目千里を極むれば山河無く

麦芒際天揺青波 麦芒天に際わりて青波を揺るがす

王畿優本少賦役 王畿本を優にして賦役少なく

務閑酒熟饒経過 務め閑に酒熟して経過饒し

此時晴煙最深処 此の時 晴煙最も深き処

舍南巷北遥相語 舍南 巷北 遥かに相語る

10 翻日迴度昆明飛 日に翻り迴かに昆明を度りて飛び

凌風邪看細柳翥 風を凌ぎ邪めに細柳を見て翥る

我今誤落千万山 我今誤つて千万の山に落ち

身同儔人不思還 身は儔人に同じくして還るを思わず

鄉禽何事亦來此 鄉禽 何事ぞ 亦此に來り

15 令我生心憶桑梓 我をして心を生じて桑梓を憶わしむ

閉声迴翅帰務速 声を閉じ翅を迴らして帰ること速やかなるを務めよ

西林紫樾行当熟 西林の紫樾 行くゆく当に熟すべし

この詩は、第一・二句の鳥のモチーフから始まる。それは春の心地よさを表わすとともに、望郷の思いを詠じる伏線ともなっているだろう。第三・四句は、途切れた夢と故郷への思いを述べ、第五・六句で、異郷と故郷を隔てる障害がなくなつたことをいう。隔てのモチーフの解消である。第七・八句は、ユートピアとしての都を歌うもので、第九・一二句は、都の空を鳥が飛ぶようすを描いている。第一三・一四句は、異郷での貶謫の暮しと帰らぬ意志を述べる。第一五・一六句は、再び鳥のモチーフにより望郷の思いを詠じ、第一七・一八句で、鳥よ、故郷に帰れと呼びかけて、全体を結んでいる。

「聞黄鷄」には、望郷詩として注目すべき点がいくつかある。まず、「一声夢断楚江曲、满眼故園春意生」とあるように、夢が中断したところから望郷の思いがふくらんでいくことである。漢魏六朝の望郷詩について、故

郷の夢の詩には、幸福な夢と不幸な現実の対比が見られることをすでに述べた。唐詩になっても、この図式は変わらない。例えば、顧況の「聴角思婦」(『全唐詩』卷二六七、中華書局、一九六〇)を見ると、

故園黄葉滿青苔 故園 黄葉 青苔に滿つ
夢後城頭曉角哀 夢後 城頭 曉角哀し

という。夢から覚めると悲惨な現実に引き戻されるのである。つまり、夢の終了・中断は詩における幸福な時間の終了・中断を意味している。ただし、夢の中では故郷までの距離がなくなることを利用して、夢の中でも故郷は遠いと歌う例がある。西域での異常体験を描く、岑参の辺塞詩である。「宿鉄関西館」(『岑嘉州詩』卷三)の中で、次のように歌う。

塞迴心常怯 塞迴ほまかにして心常に怯え
郷遙夢亦迷 郷遙かにして夢も亦迷う

長安から安西へ赴く途中の作で、故郷まで遠いことをいう。また、「与独孤漸道別長句兼呈嚴八侍御」(『岑嘉州詩』卷二)では、

窮荒絶漠鳥不飛 窮荒 絶漠 鳥飛ばず
万磧千山夢猶懶 万磧 千山 夢すら猶お懶し

と歌う。輪台の作で、やはり故郷まで遠いことをいったものである。これらの詩は、夢の中ではふつう故郷までの距離がなくなる、という前提が認められているからこそ効果的なのだと言えよう。

「聞黄鸝」に戻れば、「王畿優本少賦役、務閑酒熟饒経過」のように美しい故郷のイメージを思い描いていることにも注意する必要がある。「荒れた故郷に心を痛める」という望郷詩のモチーフから見れば、特異な表現となっている。それは荒れた故郷をユートピアに変貌させることによって、望郷の思いを昇華させようと意図したのだと考えられる。「聞黄鸝」は、単純な望郷詩ではない。「我今誤落千万山、身同儔人不思還」、故郷に帰らなくてもよいというのなども、額面通りに受け取ることができらるだろうか。むしろ、故郷への執着を屈折的に表現

したとも考えられる。望郷の思いを昇華させようとする試みも、昇華させなければならぬほど強く故郷への思いに縛られていたということを示すものにほかならない。

最後に、「聞黄鸝」における夢と現実の關係について考えてみよう。この詩は夢の中断の後から、詩における幸福な時間が始まっている。そして、詩における幸福な時間とは、従来の望郷詩では、夢の中の時間なのであった。その意味で、ここでは夢と現実の關係が逆転していると言つてよい。そこに、夢の中への没入を拒否し、現実と対決しながら、活路を開いていこうとする柳宗元の強い意志を読み取ることもできるだろう。と同時に、夢と現実の關係が逆転していることに注目するならば、柳宗元は現実そのものを夢に変えようとしたのだと見ることもできるだろう。いずれにせよ、それが柳宗元の現実との戦いを示すものであることに違いはない。

注

(1) 登高遠望の呪的意味については、宇野直人「登高詩の変遷 その一」(『中国古典詩歌の手法と言語』、研文出版、一九九一)が、白川静氏の著作に基づきながら説明している。それによれば、地霊との交渉、眼の呪力による対象の支配、という二つの意味がある(三七七、八頁)。

(2) 妻が遠くにいる夫を思う詩にも、このような図式が見られる。例えば、「飲馬長城窟行」(『文選』卷二十七)の中
では、

夢見在我傍 夢に見れば我が傍に在るも

忽覚在佗郷 忽ち覚むれば佗郷に在り

佗郷各異県 佗郷 各々県を異にし

輾転不可見 輾転して見るべからず

と歌う。異郷に暮らす夫の夢を妻が見る。だが、目覚めれば別れ別れになるのである。

(3) 柳宗元の故郷については、戸崎哲彦「柳宗元の故郷と唐長安城——柳宗元の故郷・莊園をめぐる唐代長安城里坊・長安県郷里に関する歴史地理学的考察の試み(上)——」(『彦根論叢』二九六、一九九五)を参照。そこで、柳宗元の意識する故郷には、河東解県、長安万年県の親仁里、長安県の善和里、長安城西の莊園の四つの地があることを指摘する。